



妙義山の奇勝



K298
258

妙義山の奇勝

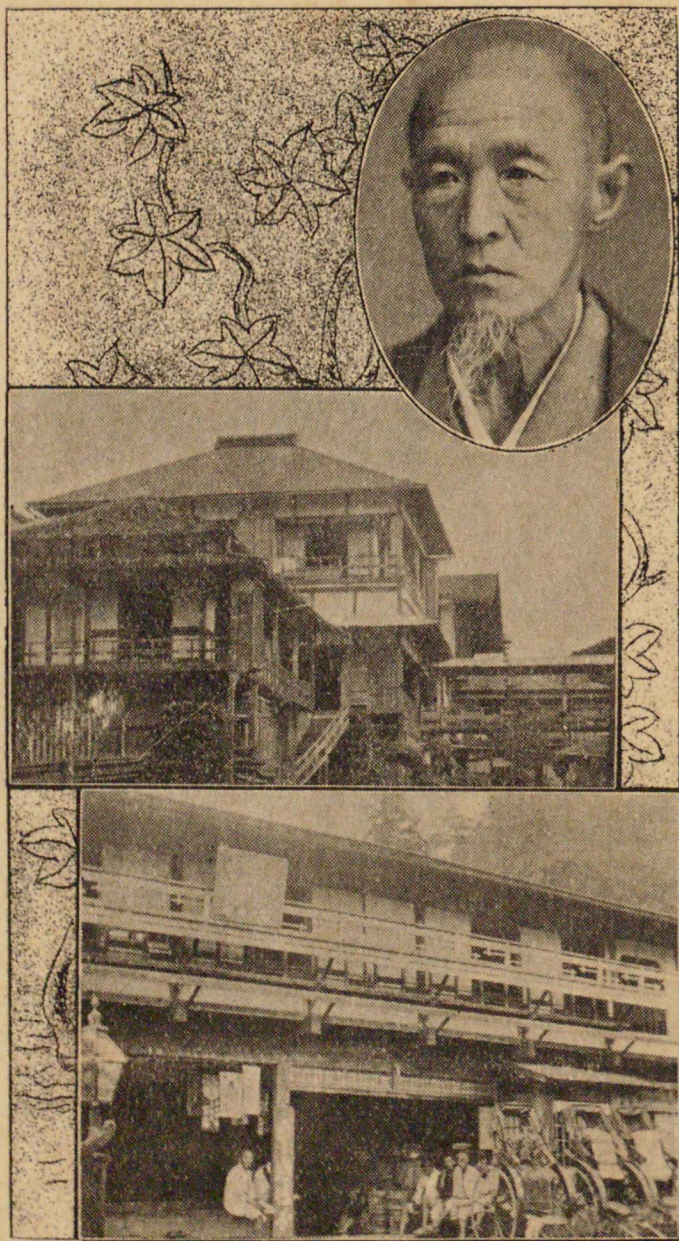
大石健造

大正四年十月廿四日廿五日

上田男子小學校生徒修學旅行ニ昇登山

一行 生徒七十七人

職員 島田 堀之内 小山 三 川 尊



(翁平傳部岡) 館旅屋菱館氣養

世養山の奇観

自序

妙義山の景は古來天下に知らる、所なれども、近時に至り其の奇勝を
探らんとして來り遊ぶもの愈々盛んなるを見る、此の時に際り妙義山
案内若しくは之と類似の冊誌類々として發行せらるゝありと雖も本
だ其起源及び變遷より名所風光に就き最も能く之を審にしたるもの
なきを憾む。

即ち茲に予の編述したる冊子は可成的、附會の舊事を避け難解の字句
を排し、専ら實際の風光と口碑に貽れる傳説とに依り數目を費して實
地に釋れたるものを以て一編と成す願して「妙義山の奇勝」と云ふ、知
らず果して在來の冊誌に比し其の一步を進めたるや否之元より見る
人の評に任ぜんのみ、唯だ夫れ本書に據りて登山者の一件侶たるを得
ば編者の望み則ち足る耳矣。

大正四年の夏

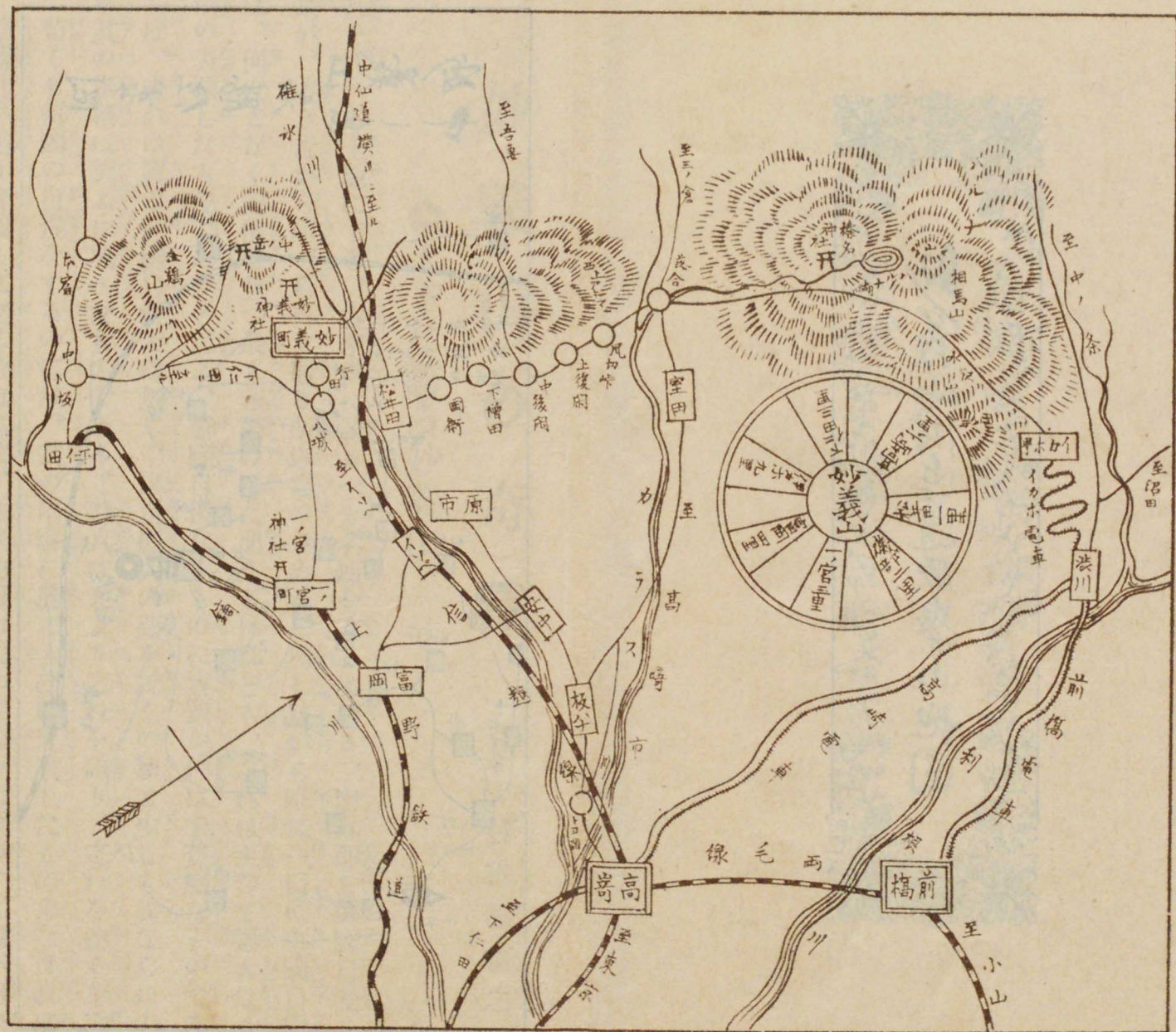
編者 誠

妙義山附近道順案内地図



次 目

妙義山附近道順案内地図	不折先生筆	一
天下に誇る妙義山	社	八
妙義山に登る		五
白雲山に登る		四
金洞山に登る		三
金鶴山に登る		二
十一位鳥と佛法僧鳥	物	六
妙義山の旅	箱	七
妙義山案内料規定		〇
機部讀泉	場	一
文苑		四
妙義町より各地への里程		九

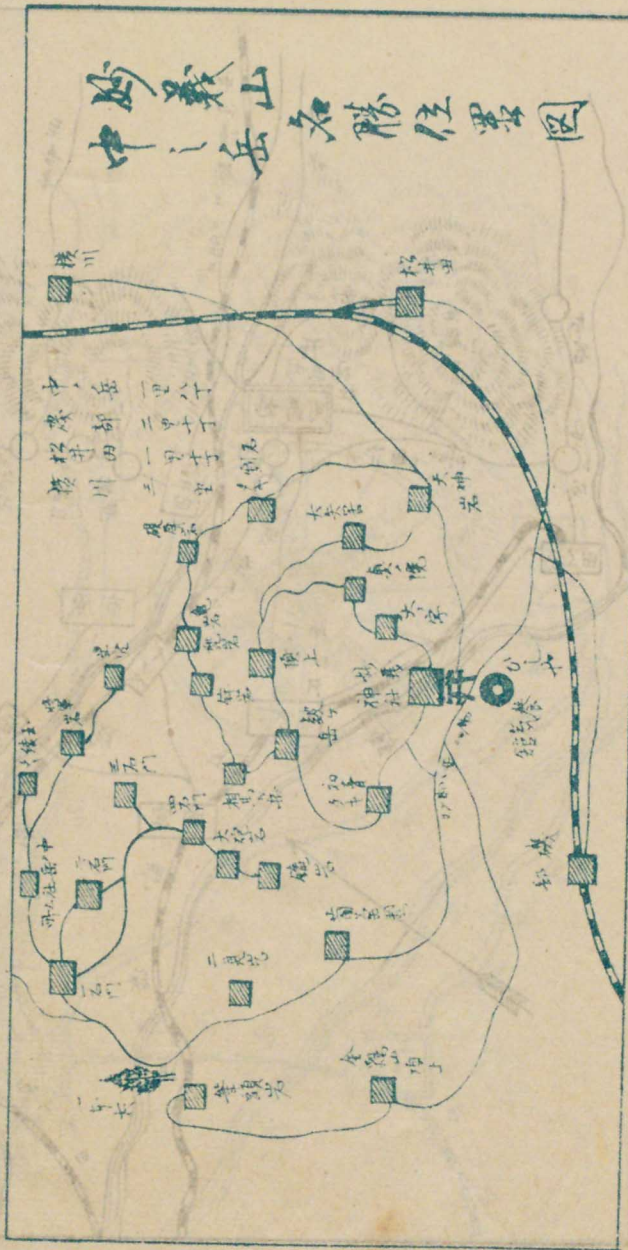


妙義山の奇勝

●天下に誇る妙義山

中村古華稿之

凡そ何れの土地にても、古來世に誇るべき名所を有して居る、之れ即ち御國自慢と云ふ言葉が、古き昔から傳へられて居る所以なのである、然しながら唯だ一口に御國自慢と謂へば、何んぞなく偏狹で且つ最も頑固の様に聞えるけれども、之れは至つて強大なる自信の表顯したものであると思ふ、御國自慢なるものに實質が伴はず貧弱なものであつたならば、夫れは眞の御國自慢では無く、畢竟愚人の夢を説くの類と少しも異ならぬので、寧ろ其の無稽は笑ふに堪へたものである、吾人は元より之れを語り、之れを聴くを欲しない、苟くも御國の自慢をするのには、其の内容に於て大ひに充實したものでなければならぬ、實際上内容が充實して居つたならば、御國自慢は反つて天下に潤歩する事か出来るの

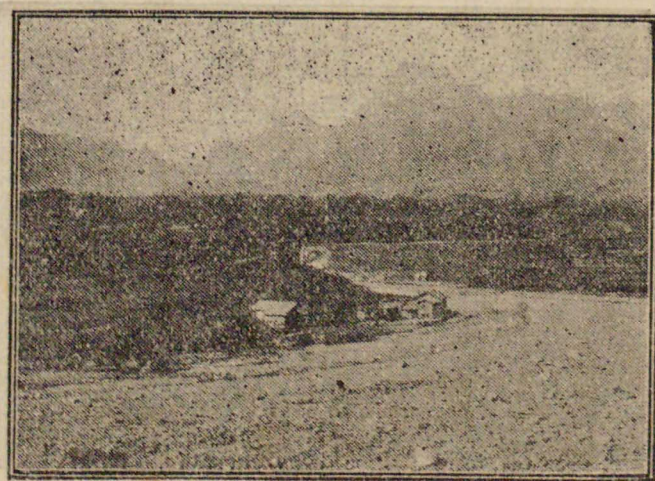


は必ず疑ひはないのである、安藝の宮嶋、丹後の天の橋立、陸前の松嶋の如き、最も能く此の意味を説明して居るものではないか、由來日本の三大景として否な世界の名所として異國の人士にまで褒賞されて居ると云ふものは、今更謂ふまでもなく天下其の匹儔を見る事の出来ぬ奇と、壯と、美の天景を充實して居るからである。

實に此の意味に於て古來我が上毛の地と雖も、山美、水光の優を以て大ひに天下に自慢すべきものは決して少くはない、即ち川には利根、渡良瀬の二大川あり、温泉には伊香保四萬、草津、磯部などがあつて常に吾人の爲めに澡浴の快を興へて居る、更らに名山としては赤城、榛名、妙義の三山で何れも國の中央に崔嵬として聳立し共に縣下の勝景であるばかりではなく、其の名は天下至る處に馳せ、今哉兒童走卒と雖も、或は文に歌に或は畫に依つて、恐らく知らぬものはなからうと信するのである、而して赤城山の雄大は何處までも男性的である、熱血的であるが之れに反して榛名山は、其艶麗全く處女的で而かも嬋

娟窈窕たる美人的であるが獨り妙義山に至つては、威風凜凜乎たる武人の如く氣骨稜々として宛かも英雄豪傑に髮髯たる所は確かに上州三山中の最なるものである。

妙義山は東京を距る陸路三十里、群馬縣北甘樂郡の突角に鼎立し全山悉く奇巖怪石に成り無數の巖角里餘に延長し驚くべき巖巖は自ら三大突起を爲し、之れが亦た三山を形づくつて居るのである、即ち其の一を白雲山と謂ひ一は金洞山(中の岳)と唱へ一は金鷄山と稱するのであるが、妙義山とは此の三山を總稱したのである。

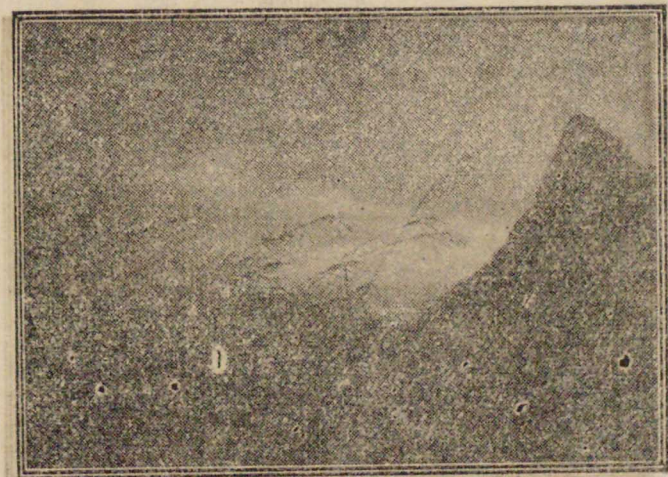


山三義妙るた見りよ町田井松

妙義山は四季行樂の名所として其の奇勝に富めるも
の實に此の地に及ぶ所はなからうと評判があるのも強
ち過賞ではあるまい。

春は花咲く櫻野や、菫、蒲公英、嫩草の萌ゆる野山
を彩りて錦の蓆と擬ふべく、妙義の道や樹々深く咲き
亂れたる桃、櫻、心も赤き紅梅はいと麗しく香しく牡
丹、芍薬、藤の花孰れつきせぬ眺めなり。

花落ちて蜂憂ふ夏の夜は慈悲心鳥も聴ゆなり、金風
一陣吹き涉水の流れも清らかに桔梗、芍薬、女郎花
錦織りなす楓葉に哀れ妻戀ふ鹿の聲、秋は悲しき風
は梢を拂ふて颯て亦、冬來にけりとなりぬれば、雪は



妙義山三山義の秋景

名に負ふ中の岳、四方の景色は白銀の珠を敷くばかりなり。
恁くの如く四時特趣の天美は代謝新陳して變る事がない、人の此の仙境を憶ひ、神園を
慕ふて此の地に杖履を曳くもの年毎に多く、螻蟻の一塔閣てい觀を呈するものも強ち偶然で
はないのである。

畏くも去る明治三十一年七月内親王貞宮殿下、御避暑を當地に求め行啓遊ばされてから
爾來公侯は勿論年々皇族の御成り遊ばさるゝもの彌々多く、四季の觀光、避暑の士人、
貴賤貧富の別もなく絶へず雲の如く遠近より來集して頗る殷賑を極めて居るが、殊に全山
の紅葉、漸く霜に飽きて渥丹の如く燦々、爛々遠きは紅雲の如く近きは亦た絳繪の如く、
嶺に跨り谿に亘り翠松其の間を彌絳して風趣言ふべからざる秋の日子は、觀賞の雅客、
恰かも織るが如く學生あり、佳人あり、文士、墨客あり、醉歩蹒跚たる醉客等あつて其の
相來往する様は實に謂ふに謂はれぬ賑ひである。

東京上野停車場から仲仙道行の汽車に乗り、高崎驛で信越線に分岐して磯部又は松井田驛に下車し、それから妙義まで直行するのである、毎年十月十日頃から十一月十日頃迄は上野、横川間の汽車割引があつて磯部、横川間は其の期間内だけは幾回乗降するも差支ないといふ例になつて居るので頗る便利である、磯部、松井田からは人力車又は馬車の便があるけれども、近時大ひに道路を修築したので通路最も宜しく勾配至つて緩かな上りであるから、婦人、小兒の歩行にもさして困難を感じる様な事はない、一抹の淡霞を水彩の畫中に加へた様な優美清秀なる行路の風光を賞しながら、行く事約一里半にして地勢愈々高層を覺ゆるのである、有名なる男坂、女坂と云ふのは此所にあつて即ち妙義町の關門をなして居る、男坂の方は舊道で勾配も極めて急であるが之れに反して女坂の方は亦た至つて緩やかな登りで、先年新に開いた道路である、坂を登りて四五丁進めば養氣館並に東雲

館の休憩所が設けられてある、店員は辭を低ふして懇懇に客のお宿りを問ひ禮を正して妙義山登降の客を親切丁寧に送迎して居るのは、誠に行き届いたものである、尙ほ行く事二三丁にして妙義町に達するのである、屋舎櫛比して一小市街を成し旅亭、商家軒を駢べて稠蜜し四時般賑を極め物價も餘り高くはない、亦た地勢も急斜であるから排水も至極宜しく、空氣の乾濕も其の度を保ち衛



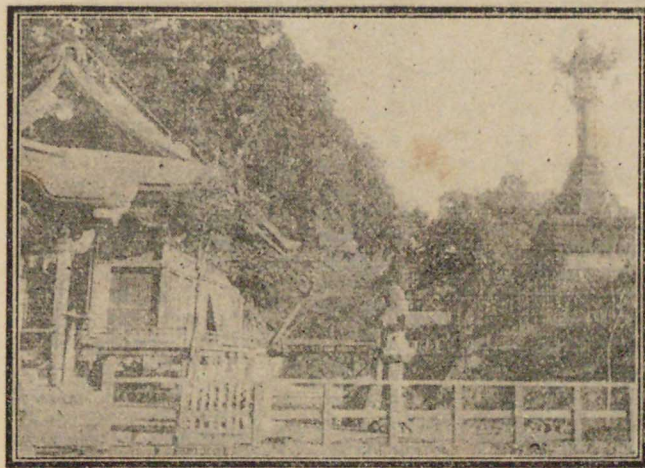
妙義山の日の出

生に最も適して居る、一日の旅の疲を先づ旅舎の樓上に休め、窓を拂つて關東の平野を一望の裡に收瞰し夕に月光を掬して心を慰め、而して翌朝妙義日の出の光景を眺めながら朝飯を喫し馳て晝食

の用意を命じ山案内を雇ひ、それから旅装を身輕に調へ杉の八角に削つた金剛杖を買ひ求めて、先づ前方の白雲山から登山する順序になるのである。

◎ 妙義神社

神社は白雲山の麓にあつて、日本武尊、盤長姫命（丹生大神）豊受大神（菅原道真公）大納言長親公を祭つて居るのである。



白雲神社及常夜燈

例祭は毎年一月初卯二、三の卯四月十五日、十六日、十月九日と定められてをる、左に少しく神社の沿革に就いて述べて見よう。
妙義神社は、宣化天皇の二年、此所に鎮座したであ

ると云ふ事が里老の相傳ふる所である。社記にも見えて居るから之れが正に創建の紀元であらうと思はれる、而して元は波已曾大神と稱へ奉つたのである、三代實録には、元慶四年五月二十五日戌寅授上野國正五位下波已曾神正五位上勳十二等とあり、亦た上野國神名帳には從二位波已曾明神と見えて居る。

妙義神社は昔上野東叡山の宮様の御隠居所になつて居つたので、皇室の御崇敬最も厚く殊に東叡山の宮代々御親祭の神社であつて別當の高顯院石塔寺是心院がお留守居をなされて居られたそうである。

明治維新の少し前迄は、妙義大権現を上野に祭祀し壯大美麗なる社殿と妙義役所のあつた事は今尙記憶して居る古老の話に據りて考へても上野東叡山との關係は實に尋常普通のものでなかつた事は、容易に想像が出来るのである。

又舊幕府からは毎年玉串の奉納があつて當山からは一品公辨親王の御親筆に成る「妙義



社 神 義 妙

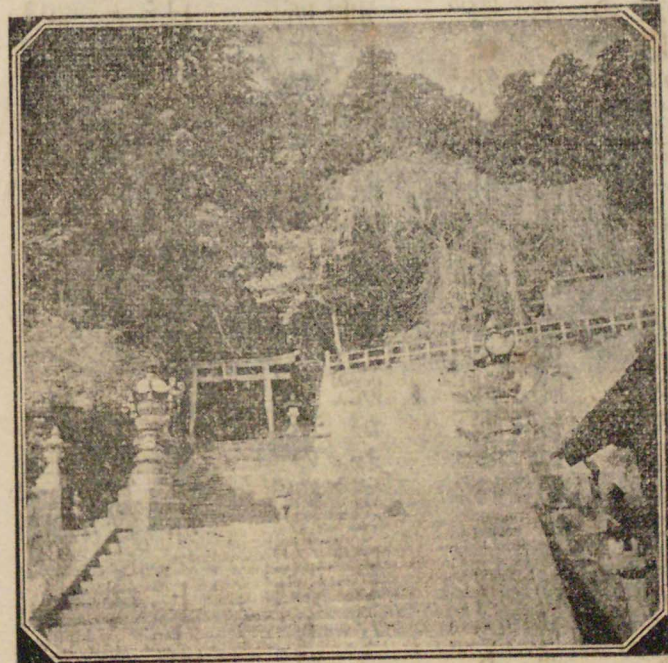
補せられたが全十月十四日座主を辭して全十六日出京せられたが其後寶永四年六月再び還りて座主に補せられた人である

往昔、波已曾の神と稱ひた頃の社殿は式外の官社であつて頗る宏壯美麗を極めたものであつたが、中古に至つて衰微を來し建武の朝起るに至つて、華山院長親公の社殿を改造したのである、更らに慶長七年葉山左衛門と云ふ人が、中根七藏に命じて社殿の改築を爲さしめてから今日の様な宏壯優美な建物と成つたのである、尤も從前の建物も亦た美麗であるからと云ふので其儘本

大權現」と書いた擡ものに東叡山の印を押したものを幅物として、東叡山の宮から獻納するのが例になつて居つた之れを舊幕府に於ては、前年の分から諸侯方に頒ち與へたものであると謂つて居る今現に此の幅物を所藏して居る人もあるそうだ。

尙幕府からは御朱印三十石の神領を寄進せられ家綱將軍は特旨を以つて山林二十町八反十三歩を寄進せられたのである。

因みに一品公辨視王と申す方は天臺宗第百八十八代の座主後西院第六皇子母六條の局贈正三位藤原定子大僧止公海の弟子で元祿六年座主に



居 鳥 大 社 神 義 妙

社の右隅に移し社號と建物とを保存して拜殿は現今の神樂殿に引き直したものであるが、之れと同時に石垣も築き改めて別當職高顯院の建物は東叡山の宮と御兼帯の神社とし且つ御隠居所としたのである、その御隠居所と云ふのは四方十二間八棟造りで色々な彫刻なども施してあり頗る立派なものであつたが嘉永年間不幸にも祝融子の殃禍に遭ひ、可惜建物も灰燼に歸したのである、今の建物は嘉永五年に再建したもので近年社務所をも總括して單に宮様御殿と唱へ又は晨光閣と稱し或は白雲閣とも呼んで居る、晨光閣とは往年北白川宮殿下が御親筆を以つて遍額に認めさせられ給ひてからの事である。

神社を妙義と唱ひた原因を探つて見ると明和七年、小野竹叢と云ふ人の温故隨筆には恁う書いて有る。

華山院右近衛大將長親公白雲山の邊りに來り、明巍と改む、此の人和漢の才に秀で、上古の菅原道真公にもまさり賜へば道真公の御師法性房尊意とも申すべしと時の人稱しけり、時世れし移り、長親郷の事をさし失ひ尊意の靈と謂へり、白雲山は波已曾と稱し往古よりの鎮座なり三代實錄に云々

又た耕雲山人と號し假名反切義解耕雲口傳等を著したたのである、尙ほ宗良親王について歌道を學び、其の詠歌は世に傳はつて居る、妙義權現は實に此の人を祭つたものである、明巍を妙義と改めたのは、何時の頃か確とは判らんが、元神社に仕へ奉つた僧侶の之れを書き名ぞらいたものであらう。

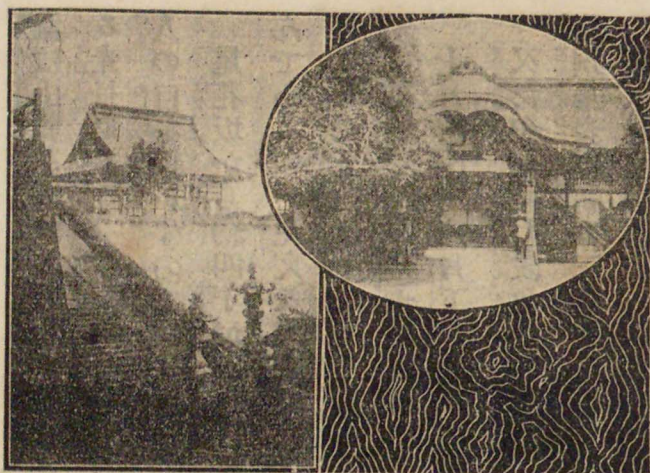
(妙義神社寶物の種類は茲に畧す事にする)

* * * * *

神社裏門の側に神馬殿と云ふ木馬が有る、此の木馬には石菖蒲を啜せてあるが之れには面白い由緒があるそれは昔神社が非常に衰微した時神主が此の木馬を持



妙義町全景



宮 様 御 殿 及 社 務 所

先づ旅籠を出て白雲山より登る、妙義三山中最も嶮
 阻であつて且つ最も眺望の佳なるものは此の白雲山で
 ある、碓氷の西南に連り萬峯其の背面に聳い、常に雲
 煙山を罩めて霞か雪かを疑はしめ、燃ゆるばかりの紅

● 白雲山に登る

に不思議の事もあるものだ、此事を神主に告げたの
 でよく馬を検めて見たら鎖は何時の間にか切り放
 され蹄には泥一面に付いて居つたので此の馬の所爲と
 云ふ事が判明した、夫れから石菖蒲を啜せる事にした
 ら其の後は全く作物を害する事がなかつたと云ふ話で
 ある。

つて居つたが、餘り貧乏で神の御供物位で辛くもその日を送るほどであつた、處が或朝の
 事である、何時もの御供物が悉く無くなつてゐるので大ひに腹を立て、見たが致し方は
 ない、止むを得ず一食を排する様になつたが、今宵こそは其の盜賊を待ち伏せて辛き
 目を見せて呉れんと、棍棒を持つて闇に隠れ息を殺して様子を窺つて居ると、夜も丑滿ど
 きと思ふ頃、ガサ／＼と足音立て、御供物に近寄りたのでイキナリ神主が身を躍ら
 して持つたる棍棒振り上げ、力まかせにエイと斗りに殴り付けたので、骨も爲めに碎けた
 かと思ひきや、くだんの曲者は聲も立てずに、こそこそ何れともなく逃げ失せてし
 まつたのである、翌朝になつて神主が何心なく木馬を見ると脊骨の所に今迄無かつた傷が
 あるので、さては此の木馬の所爲であつたのかと始めて気が付き、それから此の木馬を鎖
 で以つて嚴重に繋ぎ置く事にした、その後亦た程経て毎夜の様に附近の畑を荒するものが
 ある、そうして其の荒した形跡から察すると馬が荒した様に思はれるので土地の者も大ひ

葉は山麓を繞れる遠近の樹々と相對し恰かも錦繡の衣を纏へる如く眞に名畫も遠く及ばざる光景である、妙義神社は山の麓に在り亭々たる老杉の間に隠見して金碧朱楹の妙匠は人の目を驚かすのである。

尾花坂から約四丁がほど往きて石壇を登ると石を四角に積み重ねて有る中に篠を植え込んであるのが見える、之れは往年親王家が在せし事を表したもので、其の上には二王門がある、二王門の上に准三宮一品公遵親玉の御親筆だと云ふ額が掲げられてある。

中御門院第二皇子權典侍局清水大納言實業卿女延亨二年第二百三代天臺座主寛延二年七月辭座主八月下向武州寛永寺

又た少しく石段を登つた處に二品良尙親玉御親筆の篆額をかゞげたる紫銅華表がある、紫銅華表の高さ三間三尺

後水尾院御猶子一品式部卿智仁親王御子正保三年三月第百七十五代天臺座主慶安三年

正月辭座主

寛文八戊申年十二月吉日

此所を過ぎて杉の小川に架けたる建の岩橋を渡ると北に魚形石、南に古き碑が立つて居るのを見受けるのである、之れは兒島高德の碑で、其の歌に



岩 頭 筆

此所に生ひ茂る巨大なる杉多く天つ日影も渡らぬまで枝さし交えていと神々しい亦古び果てた五株の杉がある此の杉は實龜年中植付けたものであると傳へて居る

こゝろさし立る願をうちなびく此のしら雲の山にいのらん
妙義の五本杉とは之れを云ふのである、之れから石段を登り詰めた所に隨身門と云ふのが

若大臣の鐵弓鐵矢と云ふのが此の神馬殿に納つて居る、こゝから北へ通り鳥居を潜りて頂上の奥の院に上る道に出るのである、行く事僅かにして鶯瀧、日暮しの瀧（庚申の瀧とも云ふ）獅子岩、船岩等の怪巖奇石を嘆賞しつゝ、峻しき山路も金剛杖に頼りて漸く大の字に達するのである、大の字は岩石の突出した上の平面五六坪の所に木を格子形にくみ其の上から割竹を以て大の字形を造り之れにメ繩を張り通し半紙を三角に疊みて差し込んだものである、昔は神社奉賽の包紙だけにても尙ほ餘りある位だつたそうだが今では半紙二メでも充分ではないと云ふ事である、大の字の巖上は眺望實に豊かなもので心身恍焉しはし去るに忍びないのである、妙義町から此の大の字までは二十五丁、大の字から頂上奥の院まで二十五丁と云ふから町から頂上まで五十丁有るわけだが平地の七八里に匹敵するのである、大の字岩を下つて天狗の評定場に出で奥の院に向ふ、奥の院と云ふのは岩の中を石にて疊み上げ御社を築いたものである、參拜を終つて鳩胸といふ峻々たる岩を鎖にたより

あつて前に隨身、後に力神を安置す、則ち赤鬼青鬼の事である、亦た此所には三箇の釜がある、昔此釜を石壇の前に並べ常に御火を焚き五六十人の巫女並み居て湯花と云ふ事をして參詣の人が神の御託を宣を聞いたものである、更に唐門を潜ると御神殿、拜殿、幣殿、御内陣、御饌殿、神樂殿其の外數十棟の建物は何れも巧妙壯麗の彫刻を加へたのが、實に尊く

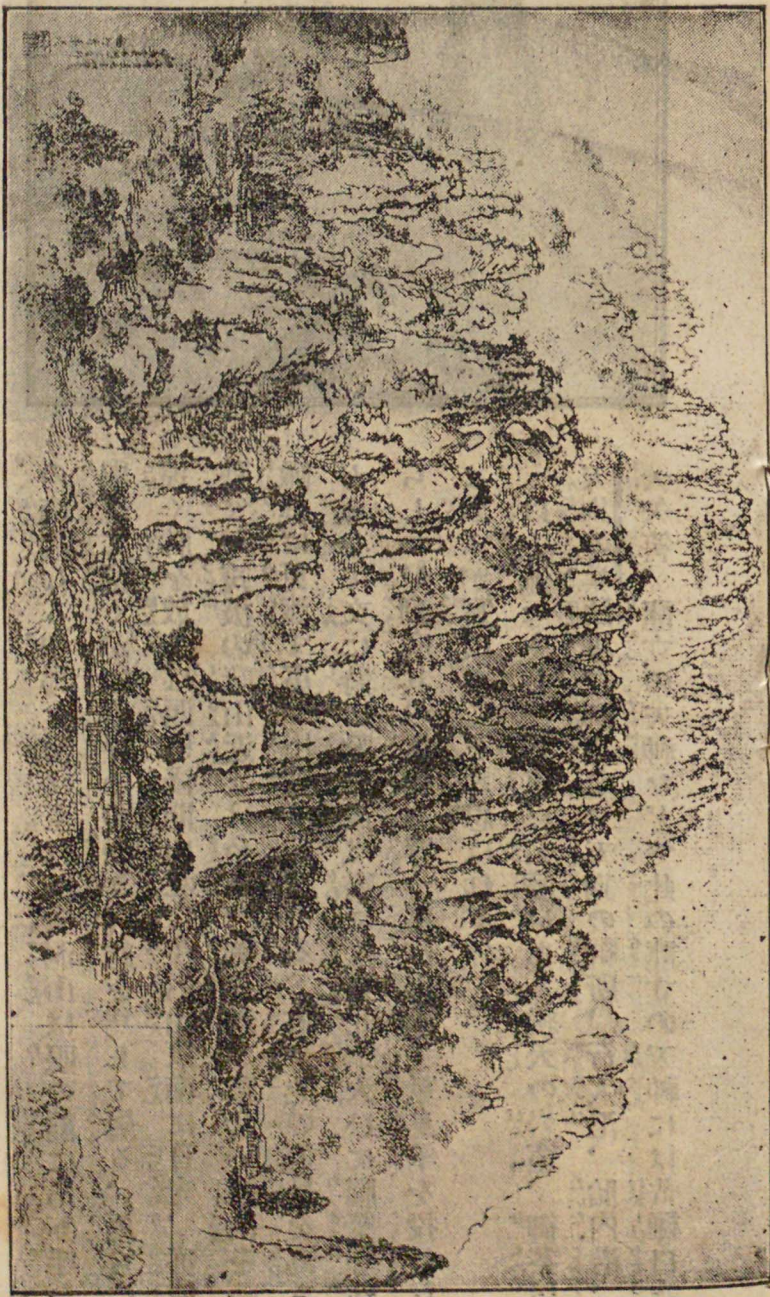


杉本一

で奇觀實に筆や口に盡す所でない、御社の裏門を出て左の方を見ると神馬殿がある、百合

が起つて来る、而して右を顧み左を見渡せば無数の巖角苦むして翠の毛氈を張り詰めた様

金洞山全景



て攀ぢ登れば平垣砒の如き巖上に出る天色清麗塵翳なく、禽鳥の和鳴、山巒の奇秀、満目の楓葉紅霞の如く爛として錦繡を呈し、黄鳥、幽谷を出て、唳々清音を弄す、其の好景絶色は實に畫ならざれば詩、詩ならざれば靈である、若し小杜をして之を見せしめば將さに車を停むる半日であらう、こゝより鼓ヶ岳に達する間は山愈々高く途益々峻しく巖崖に懸る藤蔓を捫つて登るのである、漸く斷巖に立ちて俯視すれば千仞の岩壁板を立てたよう！鬼神を挫く勇者といへど尙ほ悚然たらざるを得ないのである、亦た眸を廻らす所變幻窮りなき千奇萬態眞に羽化登仙の思ひがする、白雲山



金洞山一杉の中り岳を望む



一本杉より白雲山を望む

白雲山 裏山の風景も亦た見逃す事が出来ぬ、女坂
 の左側から四五丁東に進み天狗の里宮を経て北に筆立岩
 人肩十の字と云ふ二大奇峯を眺めながら尙ほ少しく往つ
 た所は即ち白雲山の側面である、左方を望めば石割の瀧
 俗に出臍の瀧と云ふ風景頗る勝れて居る、前方を望めば
 鉄岩、獅子岩の奇岩怪石起伏するありて一步一趣を添え
 て行く、右方は曠濶にして碓氷川の清流宛ながら銀の

郎衛門と云ふ念流の祖が籠つて劍術の稽古をした時天狗
 から輿義を授かつたと云ふ所である。



の南端なる相馬ヶ岳に至れば金洞山は眼の前にあり手を
 擧げて招くが如く呼ぶが如き容態を爲して居る、更らに
 遠く眸を放てば西に淺間山北に榛名山東南に日光、赤城
 秩父、筑波の諸山近くは金鷄、御荷鉾、稻舎の諸山を一
 瞰裡に見渡す事が出来るのである、古來此の眞景を寫さ
 んとして文に詩に歌に或は畫に推稿叱筆大ひに腦漿を枯
 らしたが到底其の眞相を穿つ事が出来ず歎息筆を投じた
 と云ふが實にさこそと思はれる。

以上述べました外更に名勝がある辨天の岩窟、御茶屋
 天狗の兵法場、御花島、天狗の御所、行人汜、胎内潜、
 天矢筈、龍立の天神などで此の龍立の天神には昔樋口次

糸を引けるかの様に見え、心身俱に爽快を覺ゆるのである。

●金洞山に登る

尾花坂から十四五丁南へ登ると撰種園と云ふのがある葡萄酒、梅酒、甘樂眞珠は此所から出来るのであります昔此通りは信州善光寺への裏街道で人通りも随分有つたのである一名女街道とも云つた其れは徳川幕府の頃表街道(今の横川停車場少し前)に關所があつて身分の低い女はどうしても通ることが出来なかつた、假令武士の家に生れた女でも殿様の御檢印が無ければ通る事が出来なだったので自然裏街道を中の岳に出て元宿わみ



第一石門

峠を越え長野縣岩村田及び小諸を経て善光寺に參詣しなければならなかつたのだそうだが、其の頃は今の撰種園の有る所を、おなか茶屋と云つて善光寺に參詣する人亦たは中の岳探勝の人が往返の途次必ず此の茶屋に憩ふて澁茶に渴を醫するのであつた。

撰種園から七曲(ヘコタレ坂)を迂餘曲折して登り前方を望むと金鷄山の筆頭岩(一名天燭岩とも云ふ)は矗々として天を衝か



第二石門

んばかりに見へ、そのまた左には子持岩蠟燭岩、擢臼岩、金鷄の風穴又は百合若大臣射拔きの岩がある、ヘコタレ坂の回程に馬返の岩を踏んで少しく進み坂の漸く盡きんとする所に立つて右方を仰ぎ見ると一大奇岩岨

々として聳え立つ之れを二見岩といふ、その天を向つて指す如きものを人指し岩と唱へて居る。

斯くて漸く見晴亭の在る平地に達すれば亭前には有名な一本杉は儼然として雲を凌ぎ數多の巖塊を叱咤する様に思はれ、展望亦た甚だ豊かである、手を翳して遠く南東の景に望を放てば赤城、日光、筑波の諸山は勿論、坂東太郎の巨流や高崎富岡の町は手に取るが如くに見え、尚西北には岩船山、甲信の諸山坡北として空に寫り名畫も遠く及ばざる風色である。

一本杉を過ぎて一二丁程歩み振り返つて見れば夫婦岩、仲立岩、恵比須岩、東仙人の窟など竝列して興趣自ら油然たるを覺ゆるのである。更らに少しく登ると此所に菅公硯水の窟と云ふて著名な所か有る、往昔菅相亟が此の窟から水を汲んで硯の水に用えたと云ふので斯くは名ぞらへたものだと傳いて居る、其の菅相亟硯水の窟近く屏風岩並びに第一石

門が毅然として聳え見るから心膽を寒からしむるのである、石門の高さ九丈餘巾八丈に餘



第三石門

ある、之れを蟹の横ばいと云ふ、此の横ばいを登りそれから堅ばいを攀ぢて第二の石門口に至る、第二の石門は第一の石門に比して規模少しく小さいけれども其の風致は優ることも

れる一大崔岩で、其の奇工妙枝は實に古人の夢みし無何有以上の無何有は今眼前に築かれたらん心地がして霎時は我れを忘れてしまふのである、時に一陣の金風吹きわたたりて門頭の喬松は萬籟を奏し身は神境に導かれつゝあるかの様な感が起る、先づ石門を潜りて稍々右に登れば偉大な岩に鐵の鎖を横に渡してある所が

決して劣ることはない、第二の石門を潜るとつるべさがりと呼ぶ一大難所がある、何んでも四五丈もあらうと思ふ、岩と岩との最も峻しき所に鎖を吊し之をたよりに降るのだから



危険な事は話しの外である、此の難所を越えて更に進めば程なく第三の石門になる、第二石門は最も小さなもので僅かに高さ八尺巾十二尺の門に過ぎぬ、東大黒岩と云ふのが此の南に見へて居る、

第四石門は高さ八丈巾九丈三尺餘有つて第一の石門と大差はない、石門の南端に廻れば一まぼろし岩、屏風岩等各特趣の風半を現はして點在する中に第一第二の石門は威儀儼乎として高く突出する様は快絶壯絶實にパノラマ

を見るが如く心身恍惚、日の暮るとのを忘れるのである之よりまた東に行けば武尊岩がある、武尊岩から少し先きに黒田の泣き岩と謂つては有名なものである、曾て故黒田清隆伯爵がよろ／＼此所まで登つて来たが流石剛氣の伯も此の岩ばかりは怎うしても登る事が出来ず、如何にも残念だと云ふので泣き出したそうであるから黒田の泣き岩とは名付けたのだそうナ、今日では鐵の鎖を渡してあるので登るには案外容易である、愈々登つて見ると大砲岩、搖ぎ岩、蟻のどわなり、虎岩、龜岩、東山狭橋、東胎内潜、天狗の投げ石、天狗の鏡岩等見るべき名勝頗る多い、此の川は恰かも東山の中央に當り一方金鶏山、白雲山を望み俯すれば磯部、松井田、碓氷川など脚跟下に見へて風景絶佳言はん方なく唯だ嘆息百出するのみである、昔は此の一圓を天狗様のお庭だと云つて誰も上る人がなかつたと云ふ事である。

* * * * *



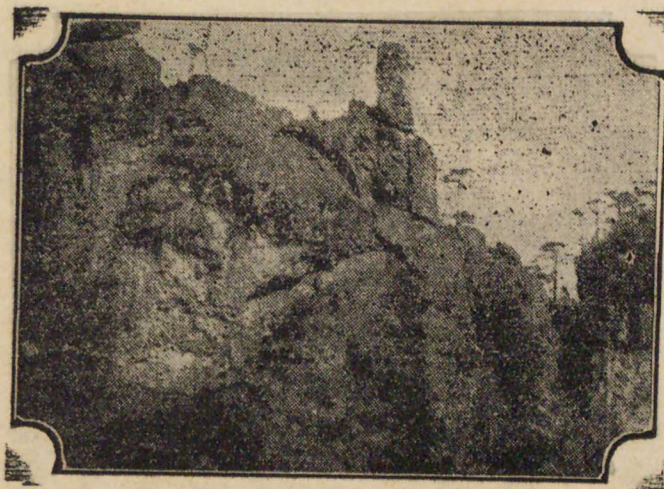
第 四 石 門 大 砲 岩 望 望

朝日岳（一名轟岩）と云ふ、目の及ぶ限り一点の遮るものなく、奇觀實に言語に絶するのである、金佛岩、八丈岩、烏帽子岩、鬼面岩、西大黒岩は此の附近にあつて何れも天美を極めて居る。

中の岳の探勝は先づ大体に於て終つたのであるが然し健脚を跨る人は進んで金洞山の絶巔に登る事が出来る、夫れは朝日岳から北に下り巖塊を跳ね踏を越えて登ること三四丁右に八丈の窟がある、此の巖窟は昔當山の開山長清坊がお籠りした所である、それから尙十數丁程登ると二條の鎖が千仞の斷崖に吊されてあるが之れぞ恐らく嶮中の嶮、難中の難であらう辛ふじて之

之れからそろ／＼元來た道を下れば第一石門の前に出るのであるが足弱のものは第二石門を潜らず直ぐに此所から登つて往くも宜しい、亦た石門を潜つて西に進めば中の岳神社がある、社務所の北に架けられてある橋を渡れば大國神社に突き當る、そして之れから右の石段を登ると日本武尊を祭つて居る中の岳神社である、神社の附近には開山長清坊の碑がある之に參拜して更らに北へ北へと廻るが如く進行すると追々急な登りになる、愈々之を登りつめると聳すり岩、西山峽の橋などが有る、懸て鐵の鎖をたよりに登ると鐵骨の梯子が懸けられてある、此の梯子を攀ぢ登つた所が即ち





大 砲 岩

れを登れば始めて金洞山の最高端（三千八百尺）に出づるのであるが身此所に立たば九夏三伏の候と雖も尙ほ冷汗の流るゝを覺ゆるのである、俯仰四顧、仰げば即ち白雲彩霞天を掩へ俯すれば即ち錦繡綾羅の裡に中の岳神社々務所をはじめ旭岳四石門等は盆景の如く左は白雲山の裏山、碓氷全山の紅葉、甲信の諸山、淺間の雄姿皆指呼の間にありて實に此の絶勝を語る形容の辭なきを憾むのである。

●金雞山に登る

妙義町を出て先づ眼に付くのは筆頭岩（天燭岩）子

持岩である、筆頭山は金雞山の突角に波柱の様に直立して居る見事な岩で之に登るのには一本杉の見晴亭から左に下つて行くのである、此の奇峯の麓から頂きまでは僅かに八丁を出でざる途で近年新に發見したばかりの頗る嶮惡な所である羊の腸を潜る様なウ子くした所を歩いて東面に廻り之れから這ひ登るのであるが岩のこぶ木*



蟹の横の這

の蔓と追々たよりて行けば鳩胸と云ふ六きな岩が二ヶ所にある、此の岩は足の踏み場も手のとゞき場もないので之れを抱える様にして登るのであるが、其の危険であるが、中の岳

さ實に想像の外で到底名状は出来ぬ、辛ふじて此の鳩胸を過ぎ頂上に達して見ると中の岳

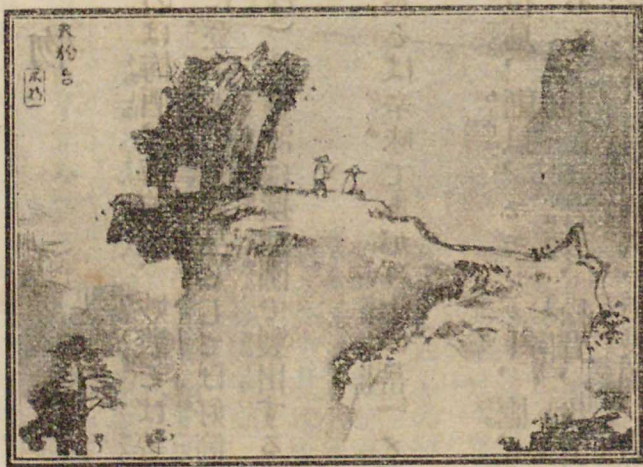
の屏風岩や大砲岩は眼前に現はれ手を差し延ばせば觸れんとする様な気がする、また此の附近に十數丈もあらうかと思ふ瀧がある之れは干瀧と謂つて宛然瀧のあつた跡に似て居る所から干瀧と云ふ名稱があるのである、また馬の耳と名付くる岩を這ひ越して干瀧の左方に廻り少し登れば鐵の梯子がある、梯子を登りつめると御嶽の祠があつて尙ほ西に行けば頂上に達す、心目轄然として眺望甚だ豊かである、暫くにして別道を下れば金鑛の廢跡に出る、此の鑛は昔小幡藩の採掘したもので總て五鑛坑、夫れから妙義町迄は約二十町程ある。

● 十一位鳥と佛法僧鳥

▲ 十一位鳥 と云ふ鳥は大きき形状宛かも郭公に似て其の啼き聲が十一と呼ぶ様に聞えるので恚ふ云ふ名が有るのである、別名ジジンチヨーとも云ふ、此の鳥は夏季産卵のため

我國に來る候鳥である、俗説には昔十一歳になる小兒山に登りて死んだが其れが鳥に化してジユーチイと鳴くのであると謂つて居る、夫れで今日に至るまで十一歳の小兒を登山させないこの事である。

▲ 佛法僧鳥 此の山に佛法と鳴く鳥が居る、佛法僧と云ふ鳥は靈域閑林の中で曉け方一夏の間チス、と鳴けばメス



、と聲を合すのだそらナ、雅路記などで見ると佛法僧と云ふ鳥は鳥に似て居ると書いてある、何んでも山深く住む鳥で夏の中は曉方ばかり鳴くのではない、初夜の頃から曙かけて鳴き霧深き日には晝でも社務所近くで鳴く事があるけれども未だどんな形の鳥であるか見た人が無いのである。

● 妙義名物

妙義名物として最も主なるものは梅酒、梅羊羹、妙義そば等で之に次ぐものは葡萄酒、樂焼、高山植物、鳥獸の類で共に登山者の土産品としては好箇のものである。

▲梅酒其他 梅酒（甘樂眞珠）葡萄酒は撰種園で製出する風味頗る賞すべきもので又値

段も頗る安い。

▲妙義蕎麥 謠にさへ「妙義そば辛味であがれ中の岳」と謂つて居る位だから實に有名

なものである。

▲鳥獸茸類 佛法僧、十一位鳥、鼯鼠、モモンガー、鷹、雉子、山雞、鳩、兔、貂等生

息して最も遊獵に適するのである、茸には岩茸、松茸、椎茸などがある。

▲高山植物 櫻草、岩松、熊谷草、敦盛草次いで長蘭、岩菜、大文字草などである。



朝日岳 髯摺岩

● 妙義の旅館

妙義山の旅館に養氣館（菱屋）及び東雲館と云ふのがある、養氣館の主人は菱屋傳平と謂ひ東雲館の主人は齋藤鐵次郎と謂つて共に繁榮を極めて居る。

▲養氣館 は文化元年に創業したもので實に今日まで百十有餘年の久しき間營

業を繼續して居る最も評判も善く亦た極めて信用の有る旅館である、近年登山者が益々多くなるのに随つておのづから客室も不足を訴へて來たので近く高壯優美なる三層樓を新築し尙ほ亦た諸般の設備も滞りなく注意を拂へ諸事最も懇切を旨とし殊に團體の宿泊には

頗る勉強と便利を圖つて居る、放望漠々山美水光の觀に富み眞に恍然たるものがある、往年華頂宮、北白川宮、梨本宮各殿下御休泊の榮を辱ふし特に去る三十一年七月内親王眞宮殿下當地に御駐駕の折邸内に浴室を新築し菅原村に湧出する鹿の湯を汲んで浴湯を殿下



田能村直入の眞筆畫讀(菱屋藏)

に奉供し無上の光榮を荷ふ事を得たのである、而して近時有名なる文墨の雅人踵を接して來泊せらるもの多く中にも去る三十九年六月彼の南宗畫の巨壁田能村直入先生九十三歳の頽齡にも拘らず此の仙境を訪はれた時當菱屋に宿泊し揮毫せられたのである。

鹿の湯の開業式の日祝辭に代へて

正三位 樺 取 素 彦

いづる湯の四萬も伊香保も何かせん

ゆあみは鹿にしくものろなし

妙義山頭一古杉 千秋相對錦鷄岩
小茅店主如僊老 菓味茶香亦脫凡

明治丙午六月題於妙義山麓

菱屋爲主人岡部雅契囑

九十三翁 直 入 道 人

▲東雲館

東の曠原を一眸に收めて風景實に言語に絶するものがある、宿泊休憩とも頗る安直町噺で四時來客の絶へた事はなし。

▲妙義山案内料規定

一 白雲山

妙義町より、大の字まで 金二十五錢
大の字より、奥の院まで 金十錢

一 金洞山

妙義町より、四石門を經、朝日岳迄

金四十五錢

一金鶏山

妙義町より、頂上まで 金十五錢
奥の院より、頂上まで 金五十錢

一 中の岳

朝日岳より、頂上まで

金十五錢

一人數の多少に不拘一定の料金の外不申受候事

一日の案内時間を五時間と定む其より以上に亘る場合は一時間に付き

金八錢宛を申受候事

一 荷物五百目以上一ペ目迄金五錢、一ペ目以上二ペ目迄は金十錢を申受

候事

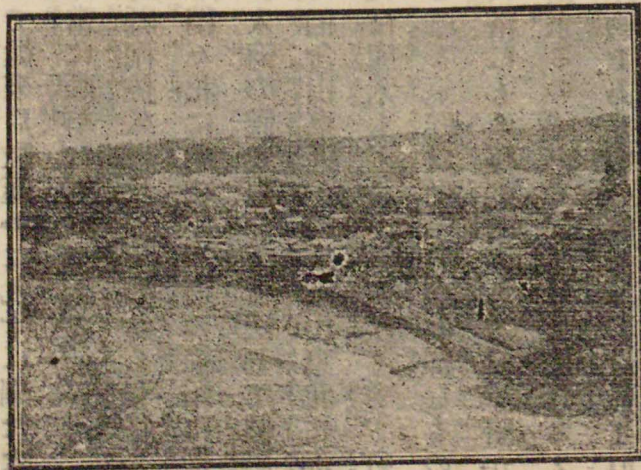
一 山駕籠は妙義町より中の岳社務所まで金壹圓五拾錢申受候

右之通り組合に於て規定仕り確く相守り可申候間若し規定以外に賃錢申受くる如きもの有之候節は事務所又は宿主へ御申出有之度候也

妙義山案内組合一同

磯部鑛泉場

磯部鑛泉場は碓氷郡に在つて上州四大温泉中の一つである、此の鑛泉の起源並に歴史に就ては他日に譲つて之れを述ぶる事にするが同鑛泉場が今日の様に般賑を來したのは明治十六年日本鐵道會社に於て上野高崎間の鐵道を布設してからの事で磯部鑛泉の名は之れから漸く傳はり此所に澡浴を試みる各地の貴賤士女は益々多くなり其の他貴顯紳士の別荘などもボツ／＼築かれたのである、更らに十八年に至り磯部停車場を置かれてから四方の道路を開修し温泉場



磯部鑛泉場全景

の改築を施すなどして大に鑛泉町の進歩を畫したので従來戸數僅かに九十に満たなかつたものが今日になつては既に二百餘戸の多きに達し非常に賑かなものである。

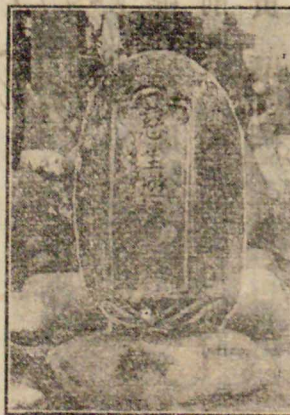
磯部鑛泉場は碓氷郡の中部に位し北甘樂郡を経て長野縣南佐久郡及び甲州から相往來する要路であるから荷物の運搬にも最も便利が宜い、地形稍々北に向ひ仲仙道の線路に接し碓氷川の清流に沿ひ水利至つて宜しく土地も乾燥し縦ひ入梅の候と謂つても決して健康を害する様な事はない、西に妙義淺間碓氷の諸山を見南に稻含山東遙かに筑波山東北に赤城榛名の諸山を望み風景實に言語に絶するものがある、又た樹木も多いので花咲く春、紅葉の秋の時候も極めて衛生に適ふばかりでなく大寒の時と雖も氣候は殆ど東京の様なもので寒氣も餘り強くなく氷雪の量も多くはないから冬季の入浴にも至極適當である、上野から瀧車に乗ると僅か四時間ばかりで鑛泉場に達する事が出来るのである、旅館の主なるものは鳳來館、山城軒、磯部館などで何れも宏壯美麗な建物であり客の取扱ひも極めて丁寧親

切であるから實に氣持が良い。

磯部名産 には色々あるが中にも磯部せんべい磯部館は有効滋養品として名代である之れは風來館主大手萬平氏が發明したもので今日では東京前橋高崎は勿論各地で盛んに販賣して居る。

磯部の諸景 吾人が浴後のつれづれに保養旁々運動をするのには磯部の十二景と云つて有名な所がある今之れを擧げて見ると

妙義晴嵐、碓氷過雁、淺間暮雪、都原夜雨、瀧山晚鐘、榛名朝霞、赤城秋月、城山躑躅、横野夕照、人見列車、桐淵渡舟、鹽窪鑛泉などである。



佐々木盛綱及大野九郎兵衛の墓

文苑



登白雲山

梶井宮盛胤親王

陰雲新捲數峰出

過客登臨興史奇

危石巉岩眼前滿

清遊何處可無詩

延寶七己未年登白雲山

黃檗潮音

一山高聳白雲裡

妙義廟宮在此間

神德日新靈感顯

珍財喜捨更無慳

妙義山

法眼古菴

三峰突兀白雲山

側視橫看不可攀

昔日神靈殘斧鑿

削成岩石在人間

無題

如電

菱屋藏

金洞山皆洞

白雲峯若雲

誰乎椽大筆

俯仰奈斯文

甲申八月宿晨光閣

柴原和全

春遍浪華三百橋

十年醉夢付蘭撓

今宵山館秋蕭瑟

無限風濤度碧霄

丁亥十月宿金洞山夜聞有殷々之聲如擊鼓者天狗奏樂也

依田學海

萬籟無聲秋寂夜

尖風過處怪雲開

老杉樹上殘檐吐

忽有山神奏樂來

見晴臺上望妙義連山口占以似諸同人

未松青萍

登々匹馬往忘還

來立天閭第一關

白雲縹緲峯重疊

此是明朝欲訪山

和青萍

金充植雲

養

曲折苔谿去復還

行人恰似度重關

遙看萬朶芙蓉碧

矗立雲間妙義山

同

石堦

一杯須當九丹還

指點石門何處關

未卜明朝能到否

白雲常在白雲山

山中口占

森槐南

玉筍參天天骨斲

欲崩欲落石和雲

要看造化雕鎔巧

妙義環生大塊文

車中望妙義山

芳川越山

奇石怪恠森列行

行看毛樹飽繁霜

山靈似愛文明化

披錦深藏幾劔鋸

宿妙義

梅原龍北

夜投妙義最高層

山氣逼燈吟思澄

何處驚祿曳聲去

一輪圭月破雲升

登山

素志十年今始酬

白雲紅葉足吟遊

漸吾詩筆寫無力

奈比金鷄金洞秋

全

維石巖々勢欲頽

神劔鬼鑿弄奇才

聳然怪返仙蹤去

紅樹白雲金洞開

全

妙義三山稱奇絕

古人題詠奈平凡

却是山靈無一字

終年空見筆頭巖

停雲吟房偶中作

留連三宿白雲岑

紅葉青苔秋正深

鎖盡十年湖海氣

晴用曝背聽鳴禽

妙義紀游詩

鄭丙朝葵園

登遍東南山復山
妙山之高噫戲老難攀
或如鬪珠龍怒髯倒豎
或如樊尾牛突角相殘
或如牙笏滿床時鵲列
或如銀燭朝天趨鶴班
或如老人放杖迎天笑
或如稠中背立向隅歎
或如翔禽偏斂翼
或如睡娥雙墜髮
是碧美容是玉筍

莫售丹青圖屣顏、我於名山誇勇往、
鼯猴爭命殊痴頑、噴斤肩輿試使步、
木顛石倒無路其出間、巍々朝日嶽、
蠹々金洞巒、負最千丈屹、石竇儼天關、
梯雲棧霧飛不到、上掛情人扶將百尺鐵連環、
已矣絕頂登覽衆山小、無乃天
意使之壯觀爲全慳、即此羊腸九折坂、
不獨嶮巖蜀道難、高歌當護李供奉、
不道錦城不如還、斷欲天明重理屐、
窮搜峯壑百盤々、直恐傷風慙兩尺
尺迷仙寰、客舍歸吟一莞爾、木假山頭苔花班、

佐々木高行 全

踏み分けて入んよしあき身あれとも山のゆかしき峰の白雲

黒田清綱 全

かく人の筆を巧みと思ひしは此山水をしらぬありけり

全 人 全

秋山のもみちの色はうすくこくろめし時こうにしきありけれ

真宮殿下御手植楨

楯取素彦 全

君か代の榮をいのる御心に苗木の楨を植給ひけん

樵歌 入山

柴人のうたふをきけは山にてもたのしきふしはある世ありけり

兒島高德かものせる古碑さいへるを

いつこゝに兒島三郎石にさへ花をさかせし君か勳

黒田清綱 全
近藤芳樹 全
富岡鐵齋 全

白雲のあやしき殿の石門はひとふた三四つみねに聳ゆる

明治三十一年七月内親王眞宮殿下當地の舊御殿に駕を駐めさせられしをり

國民のこゝろつくしのかり殿にみ千涼しくも休みますらむ

三年生の竹の青葉のすゝしくも風かよふなり軒の夕くれ

白雲山

園基祥 全
東久世通禧 全

白雲はわけいる山の名のみして紅葉にてらす杉の下道

松間紅葉

黒田清綱 全

山まつの木のままに匂ふもみち葉を夕日のさすとれもひけるかな

とりのこゑ水のさゝきによう明て神代に似たり山中のなる

佐々木信綱 全

あかれさす夕日のかげのてりろひて岩根の紅葉いろまさりけり

山家暁

柳澤交眞 全

まじか啼く聲ばかりしてあかつきの水さめさびしき山の奥かな

白雲山

源清綱 全

もみち葉を見さりし人や山の名を雲もいひはじめけむ

遊山 全

月かげは此もさばかりむらきて踏にあさかし夏の夜のしも

尊意僧正 全

妙義町よ
り各地へ
の里程

磯部鑛泉 二里餘 一ノ宮町 三里 榛名神社 七里
富岡町 三里半 下仁田町 三里 高崎市 六里
伊香保温泉 九里 松井田停車場 一里四丁 赤城神社 十六里

大正四年八月一日印刷
大正四年八月五日發行

定價金拾貳錢

群馬縣前橋市北曲輪町七十八番地

編輯人 中村 十郎

全 發行人 田島 謹一郎

全 印刷人 小谷 野善八

全 印刷所 上毛印刷株式會社

不許不復



發行所 前橋市北曲輪町 錦雲堂

名梅羊羹

物葡萄羊羹

諸苗木販賣仕候

群馬縣北甘樂郡妙義町

撰種園小澤善平

妙義町中之嶽登山の中途
御休憩御隨意

煙草、妙義名所繪はがき、

名産妙義羊羹、上毛名産

桃羊羹、磯部鑛泉煎餅、

碓氷名産蜂蜜、

御 上州松井田停車場前

休 妙義山 菱屋支店

處 憩 養氣館 神戸藤三郎

清爽なる離れ座敷増築、
閑雅且つ幽静なる新庭園、
旅館 住吉屋
如何にせば御客様方の御満足
遊すやに付絶す努力致居り候

前橋市桑町
電話百〇七番

高崎市八島町

田島屋旅館 清水太吉

御料理

仕出し

樂

前橋市榎町

電話三五三番

各宮殿下賜御買上光榮

一府十四縣聯合共進會

二等銀牌小倉羹 龜

群馬縣手土産品評會

二 一等銀牌

前橋市工藝品展覽會

二 等銀牌

三 山煎餅

群馬縣手土産品評會

三 等賞一子山

松 堂

前橋市連雀町
電話一三一番

弊館は妙義町の本道を正面に迎へたる三層樓にして客室清洒空氣
の流通最も良く坐ら數十里外の展望を恣にすべく避暑地としては
無比の好適地に御座候先年華頂宮殿下、北白川宮殿下、梨本宮殿下、
伏見宮殿下、の御休憩を辱ふしました妙義山紅葉季節は特に迎接の
準備を整へ何時如何なる御多勢の御休泊なりとも聊か御不便なき
様設備致行之候間神社御參詣或は御探勝の際は御光臨の程奉願候

妙義山
御休憩所

養氣館

菱屋傳平



Red square seal with Chinese characters, likely a collector's or publisher's mark.